

北西英国における非典型的マナー

富 沢 靈 岸

本稿は「英国における典型的マナーと非典型的マナー」と言うテーマで英国各地域のマナーの類型を取扱う研究の一部であり、内容的にさきに北陸史学第十号に発表した論文の続編となるべきものである。

封建社会の研究はマナー研究を基礎とすべきものであるが、そのマナーはその成立基盤である村落共同体の差異、また領主権の強弱によつてきわめて変差に富むものである。マナーは賦役農奴制機構をその根幹とすると言う基本的規定は決して誤りではない。しかし賦役農奴制機構が完全に行われている典型的マナーの外に、賦役農奴制機構が成立する場としての直領地を欠如するマナー、また賦役農奴制機構を必要としないような牧畜地域のマナー、つまり非典型的マナーの存在も無視出来ない。このような非典型的マナーにおける領主と農民関係、封建的支配のあり方は所謂主従制、恩貸制などの封建的諸関係を含めた封建制規定の再検討を要するものであろう。

一 ロッセンデール地方 (Lancashire) のマナー

ランカシャー東部のブラックバーン郡にある Irwell 川を中心とした Forest of Rossendale と呼ばれる地域をとりあげる。

この地域は、征服後、征服王と共にノルマンより来た Roger de Poitou の Clitheroe honour の一部として Haslingden 村を中心に開発された⁽¹⁾。ドゥームズデイ・ブックでは Clitheroe honour には二十八人の freemen

乃至 thegns の二十八マナー（全部で五ハイド半）があり、その下に submanor として四〇カルケイトが算えられている。その一つとして Haslingden⁽²⁾ があつたとされている。全然未開拓ではなかつた訳であるが、開拓地はきわめて少なかつたものと思われる。その後ウィリアム二世時代には、Blackburne 郡 Clithere honour がリンカン伯 Robert de Lacy 領となつたが、forest law の適用される forest となっている。しかし、一二八四年頃 Whalley 教会が創設され、それぞれ二 ox-gang land を持った七つの附属教会を中心に小規模ながらボツボツ開拓されていった。⁽⁶⁾

この地域の発展の特長の一つは、森林地が多いと言う自然的な条件によりその開拓が大変に遅れており、開拓農耕地と言うものがきわめて少なかつたことである。しかしより大きなもう一つの特長は、この地域の開拓が矢張り所与の条件下に、農耕よりも牧畜を主として進められたことである。特に、ウィリアム二世時代より始まつた Lacy 家、就中十二世紀末の Roger de Lacy、十三世紀初頭の John de Lacy の時代に積極的に牧畜生産が推進され、領主自ら教会へ冬の飼育用の乾草刈取権を寄進したりして、教会附属地中心に経営開拓の路線が固められたのであつた。その基礎の上に、十三世紀末、十四世紀初頭の Henry de Lacy（一三一年死）時代の繁栄があつたのである。Henry de Lacy 時代には、master forester or chief forester がおかれて、各開発拠点に二、九人と言う不正規な数ではあるが forester をおいて master forester を援助させると言う組織的な官僚制を布き、forest の鹿猟林としての経営を行つた。⁽⁶⁾ すなわち、鹿を保護する目的で、小作人達の家畜飼育期間の厳重な制限、併せて小作人より家の畜飼育税の徴発——養豚税などで forest 収入の $\frac{1}{2}$ から $\frac{3}{4}$ を占めるほど重要であつた——などを行はしめ、さらに、監督と徴税を嚴格に施行するために役人達を定期的に巡回させ、その巡回の際には役人およびその従者、馬、犬などの一行のために小作人より饗応地代を徴発させ、漸次、forest の経営、その収入源の開発を通じて領主支配権を浸透させてゆくこととなる。⁽⁶⁾

さらにまた 'Henry de Lacy は' forest に牧牛場 vaccary を開設して行き (Blackbourne 郡全体で二十九あったが)、⁽⁷⁾ それぞれの各牧牛場を略々三磅の地代で booth と言う木小屋に住む牧夫に保有させて行くと言う形で領内を開拓して行った。⁽⁸⁾ 各牧牛場では七五〇頭の牛があり、毎年その $\frac{1}{10}$ が販売されたが、牛の販売と酪製品生産がその主な収入であった。そして、Keeper of vaccary をおいて、各牧牛場保有を監督させ、徴税に当らしめた。つまり、前述の鹿猟林としての経営の外に、このような牧牛場の開設、その小作制経営と言う形においても forest の開発を進めて行ったのであった。他の農耕地方では、農耕地の開拓、農民の耕地保有と言う形でマナー経営が進められて行ったのに比して、ここでは、鹿猟林としての forest 支配、牧牛場開設—領民の牧牛場保有と言う形でマナー経営が進められて行ったことは、この非農耕地帯ロッセンデル地方の特長であると言えよう。ところが、ここにおいては、領主の交替が激しく、且つ領主もその経営に熱意がないと言う事情で、十四世紀に入る頃よりその経営の転換過程が進行して行く。

以下に、この地域の各村の事情が体系的に得られないので、この領地全体について見て行くと、この領地は、一三一年 Henry de Lacy の死後、その娘 Alice がランカスター侯 Thomas に嫁してランカスター侯領に編入されたのであるが、領主の交替、ランカスター侯の熱意不足により、⁽⁹⁾ 一三二四年になると各牧牛場の牛の頭数は三十五頭に半減し、また十四世紀中頃より manor bailiff に当るような Keeper of vaccary の監督下の vaccary 保有体制が崩れて、各牧牛場 vaccary が lease holder に貸付けられて行くこととなる。⁽¹⁰⁾ 謂わば、領主のマナー経営の転換が行われ、forest の狩猟地乃至牧牛場としての直営が放棄されて専ら牧牛場として貸付けに出されて行く。つまり、牧牛場も、荒地も forest も、すべて領民、小作人へ貸付けられ、それらの小規模な牧夫、農民により少しづつ開拓されて行く⁽¹¹⁾ という方向へロッセンデル地方のマナー的経営が転換されて行くのである。

master forester のロッセンデル地方の直営 forest に関する収支決算は⁽¹²⁾

1422—44年 21s. 9d. (収入超) 1434—54年 2s. 7d. (収入超)
 1424—54年 40s. 8d. (") 1439—40年 0 0 (収支零)
 となり漸減し、一四五〇〜一年より支出超となり五三志七片の支出超、以後支出のみが増えて forest の直営は赤字化して行く。

1457—84年 67s. 11d. (支出超) 1483—44年 100s. 10d. (支出超)
 1458—94年 76s. 1d. (") 1500—01年 91s. 10d. (")

しかしながらその収入減は、牧牛場や荒地などの貸付による地代増収により充分補われていたのであり、ロッセンデイル地方の「中心地である Accrington マナーの Haslingden 村だけを例にとっても、地代収入がつぎのようにおよそ二〜三倍増⁽⁵⁾となっている事情が見られるのである。

1241年	£ 2	15s.	5d.
1311年	4	4	6½
1342年	7	6	3
1440年	7	4	4½

つまり、ロッセンデイル地方においては、各村における牧牛業を中心としたマナー経営が、当初のような Keeper of vacancy を通じた牧牛場の直接経営より、漸次、牧牛場を牧夫へ貸付けて行く経営へと転換しているのである。しかし注意すべきことは、農耕地帯の普通のマナーの地代荘園化とは異なり、ここにおいては、寧ろ地代増収、収入増のための積極的発展的な転換であったと言うことである。すなわち開拓の遅れたこの地方においては、その領地の貸付、地代荘園化には、小農民、小牧夫らによる小規模な荒地、未開地の開発の熱心な積み重ねと言う意味が含まれており、各村における収入が以前より以上に伸びて行った点が注意されるのである。

以上のように、ロッセンデイル地方は本来荒地の多い森林地帯であって、若干のオート麦生産を除いて殆ど農耕は行われず、その発展は、始めは領主による、後には小規模な牧夫らによる牧牛場としての開拓を基調とするものであ

り、しかも精々五・六戸程度のハムリット、より多くは全く孤立した isolated vaccary of isolated cattle farm として開拓されて行つたもので、いわゆる集村化はここでは進展しない。また定住を集約化せしめる自然的条件も、またその必要性をも欠如していたのであった。⁽¹⁶⁾ このような共同組織のルーズな、謂わば辺疆地開拓の途上にあるこの地方の村落は、共同体規制を生み出す程に成熟した定住段階に立到っていない。またここにおける地代の性格を見ても、鑿地代は正に原初的な形態の地代であり、牧夫達の牧牛場保有より徴発された地代年三磅も、原初的な現物給付の便宜的な金納化と考えられ、典型的な封建地代としての賦役地代給付、ウィリカチオン体制をとるまでに到らず、⁽¹⁷⁾ しかもそうした古典莊園の段階を経ずに地代莊園化して行く發展が見られるのである。

つぎに、これらの地域はヘンリー四世即位後王領に編入されるけれども、⁽¹⁸⁾ 中世末にどのような展開を見せて来るであろうか。矢張り未開森林が多いこと、牧畜業を主産業とすること、古代的な均等分割相続制が残存することと言う社会的条件に規定されて特色のある發展過程を辿るのであるが、特に十四世紀から顯著となる地代莊園發展の基本方向は変わらず、チュードル王朝時代にヨーマン層の入植が奨励されて未開森林の開拓と言う形で領地収入の増収が計画されて行く。特に一五〇六年、一五〇七年、Blackbourne 郡に対し、年収四〇志以下の土地ならば十二年の期限内で自由に貸付けられると言う王令が出され、⁽¹⁹⁾ ヨーマン的な小規模開拓に拍車がかけられた。こうしてヨーマン層による小規模開拓が王領地の収入を増やすと言う点で、マナー領主たる王の利害と借地人たるヨーマン層の利害、成長とが一致すると言う形で、比較的無計画に、⁽²⁰⁾ しかし發展的に進行して行くのである。後になって地代収入増のため、保有交替時の地代釣り上げ、不法な線画入植者の摘発、科料徴発などの手段も行使されたが、⁽²¹⁾ 一般的には領主的利害と農民層の利害とがよく一致して、しかも広大な未開森林に恵まれている所より他人の公共権侵害の争議も少なく、隣人乃至共同体員の話し合いの下に、ヨーマン層の小規模線画と言う形で領地が開発されて行く。領主、富農による大線画、小農の立退きと言う他地方の混乱はここには見られないし、また、マナーの崩壊、領主権の後退に連なるよ

うな地代荘園の成立、領主の地代収入の減退と言う他地方にありふれた事態も起らず、未開地の開拓と言う形をとる限り、十五・六世紀においてもその地代収入は着実に増加して行くのが特徴である。⁽²²⁾

1507年の Rosendale 地方の調査

	Parcel 数	tenant 数	Old rent	New rent
Rosendale forset proper	52	48	£ 60. 17s. 0d.	£ 107. 12s. 8d.
Musbury Park	8	8	9. 1. 0.	13. 0. 0.
Hoddesden	1	1	6. 13. 0.	10. 0. 6.
Accrington	8	8	24. 0. 0.	33. 13. 4.
Baxenden	3	3	5. 0. 0.	6. 0. 0.

しからは、このような領地の経営転化、その発展的転換が何故にヨーマンの小農民の簇生⁽²³⁾を生み出したのであろうか。他地方ではマナーの崩壊が進行すると、マナーの収穫が、農民層分解より出て来た富農に吸収され、マナー経営より富農経営に移行して行くのが一般的であるのに、ロッセンデイル地方では小農の簇生、ヨーマンの小農的繁栄が特徴的に見られた、また、富農の大土地を削って小農の繁栄が持続されたと言われるのであるが、それは何に基くのであろうか。⁽²⁴⁾

その理由は決して単純な要素に帰着せしめられず、開発の途上にある辺疆地方特有の自然地理的な、社会的歴史的な種々な事情がそこにあるものと思われるが、それについては二つのことが考えられる。

先ず第一に考えられることは、この地域において十四世紀当時、小作人が free tenant, tenant at will, villein の三種類に分けられていたけれども、free tenant と言っても彼らの土地は領主法廷における認可に基いて保有するもので、より正確には customary free holder であったようで、また villein も、この地域のマナー構成がルー

ズで屢々直領地を欠くような状態であつて、彼らの負う賦役も土地保有に基く賦役でなく身分的な賦役と言う意味しか持たず、彼らが次第に *copyhold* に変えられて行くことは充分推測されるのである。⁽²⁶⁾ そのような事情より、十四世紀以後 *villain* の記述は史料に殆ど出て来ず、十五世紀に入ると殆どすべて *customary rent-paying tenants* とされ、また領主(王)もマナー、領地経営の便宜上すべての小作人乃至牧夫をその範疇に含めて把えており、すべてが *customary freeholder* 乃至 *copyholder* として同じ法的支配を受け同じ慣習的権利を主張するようになって来る。⁽²⁶⁾ しかも彼らの保有は、一代あるいは何十年かの *fee* 保有とされて来、一応の手続きさえふめば自由に販売譲渡出来るものとなつて来た。⁽²⁷⁾ このような状態より、保有地の分割、譲渡がきわめて激しく、小片地が多く生み出される可能性が強くなつて来たのである。

しかしながら、さきにも註釈したように、この地域にあつては何故に小片地の集積者としての富農の析出が顯著となつて来ないのか。その理由として、そして第二に考えられることは、古来よりの均等分割相続と言う風習が長く維持されていたことである。⁽²⁸⁾ つまり、折角、小片地が集積されても、その集積された多数の小片地が販売・又貸しされる例、あるいは、それらをすべて経営して行くと言うよりも、寧ろ子供らに分けるために小作地を購入・集積しているような例が注目されるのである。例えば、*Rossendale forest* にあつた *Goodshaw vaccary* の譲受借地人 *Roger Pilyng* は、一五二七年存命中に二人の子に分与しており、また *Bacup vaccary* の *Lawrence Lard* も二人に分与している。⁽²⁹⁾ また *Francis Gartside* と言う人は、*Hasingden* 村 *Rossendale forest* において十六の保有地を集めたが、その半分は死ぬまでに手放しており、また彼は子供らに分割譲渡するために購入したとも言われている。⁽³⁰⁾ 勿論、例外的に大きくまとめて経営した者もあったが、何れにしるその死後は子供らの間に均等分割されて行くのであり、均等分割制と言う社会風習のために、たえず保有が小農民、小牧夫経営に分解させられて行くのであつた。すなわち、この社会風習の存続が、彼らの保有の自由性に基く激しい分割、譲渡と共に、益々小片地の分出を増長した

のであるが、また同時に、富農経営の存続をたえず阻止する役割をも果たしたのではないかと思われるのである。

以上のような事情より、未開地の多い開発の遅れたこの地方においては、他地方の優れた農耕企業、織物企業にただでさえ圧迫され勝ちであった上に、その激しい土地移譲、土地分割と言う内部の社会的条件に規定されて大企業が成長し難く、小農、小牧夫の小規模な繁栄、簇生を持続せしめる社会的環境があったと考えられないであろうか。⁽³¹⁾

ところで、このように小農民経営を基軸として hamlet 乃至 isolated farm (or vaccary) の形で開発されて行ったロッセンデイル地方においては、中世末までも共同体意識が成長し難いままに経過したのであるが、漸く十六世紀以後になって開発が進み、人口も増加して次第に公共権の衝突・侵害の問題が継起して来るようになった。⁽³²⁾特に、小片の綜画地が全く無計画に開拓されて行くために、それぞれの小片の綜画地に割る道路の敷設があちこちで隣人の保有権、公道権を侵害すると言う事件が多くなり、by-law 的なものの規定の必要が痛感され、それと共に漸く共同体規制が意識されるようになって来たのである。しかしながらここで注意されるべきことは、共同体規制が意識され始めた時期は、また正に、小片綜画地を中心とした個人主義的個別的経営が目覚ましく進展して来る時期でもあったことである。殆ど並行して、ステュアート王朝ジェームズ一世治下に、彼ら小農、小牧夫らが、政府収入の増収策に乗じて、示談金を払って地代固定の保証、保有権の安定を得、彼らの土地保有権、経営権を確立させて来ると言うことが注意されるべきである。言い換えてみれば、十五・六世紀におけるロッセンデイル地方の by-law 規定は、共同的意識が昂揚した結果として生じたものではなく、寧ろ個別的経営の進展の結果、その進展を調節する必要より生じたものであり、共同体規制を存続させるための by-law 規定になく、個別的経営、個人的土地所有の確立を物語る by-law 規定であった。つまり、最後まで共同体規制が成長せず、そのまま小農、小牧夫の個別的経営の進展に連なつて行つたと言えるのではなからうか。

以上のように、ロッセンデイル地方は、共同体意識が未熟であり、寧ろそれを欠如しており、封建的支配も古典的

に進展しなかった。この地方の中世より近代への歴史発展は、封建的支配の進展、その衰退という形をとらず、未開拓森林地の開拓と言う形をとったのであり、その限り、領主の利害と、農民、牧夫の利害とが一致して進行して行くのであった。従って、農民、牧夫達が、片地の小絵画を中心に個別的合理的にその経営を進めて行くと言う点において早熟な近代的小経営の成立と言う未開辺疆地固有の特徴的な歴史を展開して来ると言えるようである。

〔註〕

- (1) G. H. Tupling, *The Economic History of Rossendale*. 飯沼二郎、富岡次郎著「資本主義成立の研究」参照。
- (2) Tupling, op. cit. p. 2. この地域は初め Haslingden, Accrington 地方を中心に開発されて行つてが、十四世紀頃には Rossendale forest の牧牛場開設を中心に経営されて行く。(ibid. p. 17 ff) その頃から Haslingden, Accrington, Huncote の三村で Accrington マナーと呼ばれており、十六世紀前後より此処が Rossendale 地方の小絵画農業経営の二つの中心となつた。(ibid. p. 72 and p. 44, Table V cf.)
- (3) ibid. p. 2. (4) 飯沼、富岡共著前掲書参照。
- (5) Tupling, pp. 7-31 forest の鹿猟林としての経営の外に、牧畜鉅業活動が奨励されたと云われる。
- (6) ibid. p. 14 エドワード三世時代に入ると、領地所有者と master forester との間に響應地代徴発権をめぐって色々な争議を起すようになってゐる。例えば Abbot of Whalley と master forester の Richard de Radeclive との対立。結局 Abbot が訴訟に成功し、四磅の損害賠償を得た。
- (7) ibid. p. 20, Table I cf.

Blackbournshire vaccaries		
forest	number of vaccaries	
	1296年	1305年
Trawden	5	5
Pendle	11	10
Rossendale proper	11	11
Accrington	1	3

- (8) *ibid.* pp. 19~20 (6) *ibid.* pp. 31~32. (10) *ibid.*
- (11) *ibid.* p. 39. この地方の開発は農業によりも牧畜に重点がおかれており、農耕地開拓よりも牧牛場、牧畜場の開拓と云う形をこっていたように思われる。
- (12) 以下の表は *ibid.* pp. 33-4 Table. III より引用
- (13) 表は *ibid.* p. 38 Table. IV より引用
- (14) *ibid.* pp. 35~41 農民らの牧牛場、牧畜場および定着農耕地としての小絵画が十四・五世紀より顕著に発展して来る。Accrington, Haslingden 初め Baxenden, Granbleside, Tunstead などが Rosendale forest proper の外に開発されて行く。
- (15) *ibid.* p. 101. いわゆる集村化過程は比較的最近までは進展しなかった。
- (16) *ibid.* p. 39 and 72. 最も開発の進んだ Accrington 地方も註(2)に述べた構成を持つところの、互いに三、四哩離れた集落より成る散村で、中心となる直領地が發展せず、少くとも Haslingden 村には直領地はなかった。詳細は不明であるが農耕地も少く、わづかに家畜飼育用のオート麦生産があっただけで、共同耕作、三圃制などの制度は發展しない。何処も isolated cattle farm と云う景觀を呈した村であつて、公共地 mean ground もあつたが、村民は公共地に一定の永代的な分前地を持っており、そこに建物施設をこしらえており、可成り個別的に利用していた。(pp. 101~2)
- (17) *ibid.* 直領地を欠如しているので、当然ヴィリカチオン体制は進展しない。Accrington プナーの農奴と云われるものも専ら金納地代を納める小牧夫乃至小農民であつたようである。
- (18) *ibid.* p. 73. 一六六一年さらに Albenarle 侯領となつた。
- (19) チュードル王朝、ヘンリー七世の時、封建貴族を制肘すべく、ヨーマン保護政策が打出されるが、その一環としてヨーマンの入植が奨励され、併せて王収入の増加が企図された。(ibid. pp. 42-3) 地代は略々一エーカー当り四片であつて決して高くはなかつた。(ibid. p. 53)
- (20) 後述するように後に絵画権、公道権の争議が頻発する。
- (21) *ibid.* p. 129 ff. スチュアート王朝時代に入り、ジェームズ一世は自己の王財政難打開のために、地代の釣り上げ、その他不法絵画(無許可、無届けの絵画)の処罰、科料徴発を行ったが、何れも王収入増のための対策であつて、絵画入植の禁圧のためではなかつた。

- (22) 下記の表は *ibid.* p. 44. Table V より引用。
- (23) *ibid.* pp. 68-9, 89-90, 97.
- (24) 他の地方では、小保有が大保最後に集中されて行くのに、ここでは逆に小保有の繁栄、増加が見られる。Rossendale forest proper で、十六世紀初め、二十三世帯の七十二小片地が、中頃には五十三世帯、一〇一小片地、一六六二年には三二五の小片地と急増して行く。(cf. *ibid.* p. 76) 勿論小片地の急増のかけには、それら小片地の集積者＝富農の活動を予想せしめる。事実、Hasingden 村の Ralph Holden は、Accrington ヲナーの最大の土地保有者で、二三二エーカー半の小片地を集積していた。(ibid. p. 89) しかしこの地方は又貸制が盛んで、Ralph Holden も八十一エーカーを長期貸附に出しており、また Newhallhey の John Nuttall は、Hasingden, Rastensall, Oakenheadwood, Cowpe など沢山の土地を購入したが、一五五三―一七一年の間に多くを販売、貸出しし、彼が死んだ時には Newhallhey の世襲地と Hall Carr の小片地しかなかった。その他は全部販売、貸出しに出されていた。(cf. p. 93) また一五四七年 Christopher Heger と云う者は、Riley Hey と云う小保有を George Kley より三十年間借地したが、二年後彼は Oliver Byrtwisseil へ二十五年間で又貸しに出している。(ibid. p. 88) しかもその場合には又貸しによる利益稼ぎも行われており、Whalley 修道院領の Calf Hey と云う保有地は、修道院が王へ七志一片の地代を給付していたが、実は sub-tenant より十三志九片の地代をとっていたのであった。(ibid. p. 85) このような小片地の集積者があったにも拘らず、尚お一般には、小農の簇生が維持されていたと云うのはどう云う事情に基づくのであろうか。
- (25) *ibid.* p. 72. (26) *ibid.* pp. 72-3 (27) *ibid.* p. 74.
- (28) *ibid.* pp. 76-7. (29) *ibid.*
- (30) *ibid.* p. 39. また、販売、又貸しされる例は、註(24) 参照。
- (31) 小片地の集積者が盛んに又貸しを行っていたことは註(24) にも述べたが、その貸附期間は二十年、数十年と云う非常に安定した長期のものであり、又貸しを受けている小農民の条件は比較的有利で、その地位も安定していたと考えられる。他の地方のような富農の小農に対する搾取的態度よりも、寧ろ、小農が富農の集積地を削って繁栄、簇生を維持していくと云う点が強調されている。(ibid. p. 89)
- (32) *ibid.* pp. 116-126.
- (33) *ibid.* pp. 149-158. 飯沼、富岡共著「資本主義成立の研究」参照。

二 ウェールズ地方のマナー

ウェールズは種族習慣がきわめて根強く残った地方で、*welsh or gwely* と言う家父長制家族が土地保有の単位となっており、それがイングランドの他地方のヴァーゲイト、ヤードランドに相当していたのである。⁽¹⁾

ところで、その *gwely* と言う家族の構成は、*great grand father* 曾祖父を長とし、土地保有に関しては四代つまり第二従兄弟までを含む血族集団の大家族で（ただし危機、復讐などの事態に関しては七代、九代にまで及ぶことがあった）、普通二〇〜四〇人位を含んでいるものであった。⁽²⁾ そしてその子供および孫の世代、特に孫の世代が *gwely* の実際の生産労働に活躍していたようである。それが *gwely* のきわめて複雑な慣習の基底となる土地所有の風習に現われていて、土地は *gwely* の共有財産であるが、家父長の曾祖父が死んだ時に、つぎの世代つまり息子達の間で平等に分割されるけれども、その際、孫、つまり実際の生産労働の第一線に立っている孫の数に応じて、その意味で平等に分割されることとなっていたのである。⁽³⁾ この *gwely* の土地 (*tir gwelyawc*) 所有乃至分割の風習が、*gwely* と言うウェールズの家父長制大家族制度を維持して行く要となっていたのであるが、またウェールズにおいては、その重要な生業は農業よりも牧畜にあり、人命金制度も取引売買もすべて家畜で支払われていたから、家畜飼育権も *gwely* 種族民の重要な慣習・儀式となっていた。すなわち、男子種族民は、十四才になると、親と共に *gwely* の首長 *argluyd* (*or uchelwr or pencell*) の許に連れられ、その時より父の扶養より離れて一人前の血族員として自立すると共に、*gwely* の首長との間に血族員たる資格を通じて首長の従者 *man* となる儀式を行う。そしてその血族的主従関係とも言うべきものを強めるものとして、首長よりその血族の名の下に *da* (家畜) が貸与される。⁽⁴⁾ さらに二十一才になると、同じく首長より血族の名の下に *cyfarwys* (生計の資) と *berws* (=strips) 略々五エーカー程度の土地が割当てられ、*gwely* の共同開墾、狩猟、戦闘に参加する資格と義務とが与えられるのであった。⁽⁵⁾

以上のような慣習を通じて、ウェールズにおいては家父長制家族 *gwely* Ⅱ 血族 *kindred* の結束が維持されており、そこには *gwely* 乃至血族の *communis substantia* (共有財産) のみがあって原則として個人財私有觀念を欠如していたのであった。しかもその財産所有権は、*gwely* に、あるいは *gwely* の家父長に帰せられていたことは注意されねばならず、血族員としての基本的な資格と義務が与えられた者が、*gwely* と言う家父長制大家族を単位として組織されていたと言うのがウェールズ社会の実態であったと思われる。

このような、血族Ⅱ家父長制大家族の風習を持ったウェールズ地方においてはどのようなマナーが成立したであろうか。今、シーボームによって、十三世紀末、北ウェールズの *Prince* の配下にあった *Anglesey* 島の *Abberffraw* マナーを例示してみると、それは、この島の三つの郡 *cantref* の中の(それぞれ)の *cantref* が二つの小郡 *cymwd* より成ったが(略々一つの郡に当り、*Abberffraw* を中心に二つの小郡に分散してゐる *villae* or *hamlets* を従属せしめていたものであった。一つの郡が略々一つのマナーの如きものになっている点、ウェールズのマナーが単なる私有領地でなく、この場合、北ウェールズの *Prince* の行政的単位としての機能をも果していたことが注意される。

と云ふ *Abberffraw* マナーの直領地は、*Garthey hamlet*, *maerdref hamlet* (*Abberffraw* 村), *Trefcas-tell hamlet* の三つの *hamlets* と、4〜5 *carucates*, 3 *mills* and 2 *meadows*, *piscria* (漁場) とあつたと言われる。⁽⁶⁾ そして不自由小作人には、それらの三つの直領 *hamlets* Ⅱ *trefts* に従属してゐるものと、直領 *hamlets* とは別個の *tref* をなしているものと二種あるが、先ず直領 *hamlet*, *tref* に従属してゐた不自由小作人は、*land maer* 執司の監督下に、把耕、脱穀、收穫、乾草刈り、薪炭切りなどの労働奉仕を給付し、十七片から七志ぐらいまでの地代を払い、*Abberffraw* にある領主の水車を使用させられ(粉挽税納入)、*Prince* (or *brenhin*) の巡回の時、羊、チーズ、バターなどを物納し、その他運搬奉仕に応じたと言われる。⁽¹⁰⁾ (相続税や結婚税を納めていないが、それらを納めることが出来ぬ位に貧困であつたと考えられる。) そしてその給付の方法を一二九四年の *Extent* に

rents of assize (tunc)

慣習地代

小麦、オートミル、大麦の物納 (彼らの共同耕作のための物納)

9 villeins が一緒に羊、小羊、卵、牝鴨などの物納

もう一つの 6 家族グループが羊、小羊などの物納

もう一つの 9 villeins のグループが牝鴨 27羽

3 日間の穀物刈取り

法廷へ薪炭と藁を物納

15 villeins が秋に 300 day-works

把耕 600 day-works.

馬の飼料のオート麦物納

8s. 8d.

48s. 7d. (換算)

16s. 3d. (換算)

5s. 1d. (換算)

2s. 3d. (換算)

2s. 3d. (換算)

30s. 0d. (換算)

66s. 9d. (換算)

75s. 0d. (換算)

6s. 8d. (換算)

total £13. 1s. 6d.

つまり給付は個人別でなく、家族群、villein 群に課せられ共同給付⁽¹¹⁾されていた。Record of Carnarvon⁽¹²⁾は、
 ≪Abberffraw とは mairdref と記す一つの散村がある。若しそのグループに一人しか居なかったならば、彼
 一人で全部を負担すること⁽¹³⁾とある所から、この場合その villein 群は hamlet, tref と一致したものと推定され
 るが、ともかく不自由小作人の土地保有は、その家族群で全く平等に分けられる共同保有であったが、給付もその家
 族群で共同に負担される共同給付であったことが注意されるのである。

また直領地より離れた別個の不自由人の hamlet or tref があるが、例えば、Abberffraw 南東の Trefferewet
 村 (9 villani) とは⁽¹⁴⁾

地代	£	0	9s.	8d.
大 麦 (4 crannocks)	0	5	4	
9 頭の羊	0	4	6	

9頭の小羊	0	1	6
バタ	0	2	3
卵 180 個	0	0	7
9羽の牝鶏	0	0	9
161日の works	1	16	2½
	£ 3	0s.	9½d.

その他、Abberfrawの水車使用義務、薪炭作り、溝、水路の修理、運搬および相続税、結婚税として五志を払っている。Dyncloyden, Wewentefrauの散村も同様であるが、矢張り villein 群乃至 hamlet として共同給付しており、その給付と保有については直領地従属小作人と同様であるが、彼らに比してはるかに work 数が少ない点が異っている。

その他、villaeと言われる不自由人、自由人の混合した村があるが、その場合はさらに隷属度、耕作労働日数が低くなっている。⁽¹⁵⁾

つぎに自由小作については、矢張り直領散村とは別個の tref をなしていることが記されているが、一三五一年までは wele Bodeveryk, wele Trewaspatrik の二 wele しかなく、一三五二年からは wele Porthorion (gate-keeper), wele Simond, gavel Sayr (carpenter) が加わっている。⁽¹⁶⁾ 何れも wele = gwely として記されており、それを構成出来る一人前の種族民であった訳である。何れも food rent を金納し⁽¹⁷⁾、その他に若干の customary service を給付し、小作人になる時十志の相続税、娘の結婚にも十志の税、粉挽税三十分一税、領主の館の壁修理などを行い、またその wele 名に象徴されているように、wele Bodeveryk は鷹狩奉仕、Porthorion は守衛、Sayr は大工として職人的な奉仕をしたが、これらはきわめて必要な仕事として高い地位が与えられていた訳である。彼らの food rent は金納されてつぎのようになっている。

1294年				1352年			
	£ 1	9s.	8d.		£ 1	1s.	0d.
Abberffraw				welc Porthorion	0	3	2
Bodeveryk	0	15	11	welc Simond	0	17	11
Trewaspatrik	0	10	0	welc Bodeveryk	0	13	6
	£ 2	15s.	7d.	welc Trewaspatrik	£ 2	15s.	7d.

gavel Sayr

£ 2 19s. 3d.

この場合も、その給付は wele 毎に共同給付されたものであって、個人的に給付されたものではなかった。

このことは、ウェールズ種族民の土地保有についても言える。その実例をデンビー地方——2½ cantref を含む地域——について見ると、wele=gwely には、散村の何分の一かを占めるもの、および数ヶの散村に亘ってそれぞれの村の何分の一かづつを占めるものがある。前者の例は、デンビー Ros-Isdulas cymwd の villata of Wyckewere (今日の Wygfair) に見え、⁽¹⁸⁾ 8 weles より成り、その内 5 weles は nativi と 1 hamlet をなす、2 weles は自由人、もう 1 wele は ½ が自由人、½ が不自由人となっていて、それら 3 weles と 1 hamlet をなす。つまりこの villata は 11 散村より成り、それぞれが 5 weles, 3 weles より成っていた。そこでこの 8 weles 中の wele of Lauwarghe ap Kendalyk はこの villata の ½ を保有していたと言われるが、それは、この wele がこの村の特定の ½ の部分を保有していたのではなく、wele 全体として不定の部分をとまかく六分の一保有していたことであり、また wele 全体としてこの村の負担、給付の ½ を負担していたと言う意味があったのである。後者の例は wele of Canon ap Lauwarghe and Pythle ap Lauwarghe と ⁽¹⁹⁾ Canon ap Lauwarghe は villata of Preses of (tunk 地代 110 志の ½) villata of Astred の半村 (tunk 110 志の 10 志を負担) villata of Nau-thyn Canon の一部 (これは Astred に付属せしめられて一括して給付していたものらしい) を保有し、Pythle

ap Lauwarghe は villata of Prees の $\frac{1}{4}$ villata of Tebrithe の全体を wele 全体として保有し、それぞれの負担を wele 全体として給付したのだ。⁽¹²⁾ また wele of Rard Vaghan ap Asser は Ughalet cymwd とは $\frac{1}{4}$ Denmant, Grugor, Gylberyn, Penglogor, Permanalat とは villata 全体を villata of Hend-reuenyth の $\frac{1}{4}$ villata of Prestelegot の $\frac{1}{4}$ villata of Petruel の $\frac{1}{4}$ を保有していた。何れの場合にしても土地保有、その給付については、個人別でなく、wele 全体として、不定の部分を、但し一定の分前を保有し且つ共同給付していたことが注目されるべきである。

以上のようにウェールズにおいては、種族民と非種族民との差別が厳守され、それぞれは別個の散村を構成して相互間の支配、隸属関係も微弱であり、自由人は wele として、また血族組織のルーズな不自由人は家族群乃至 hamlet として共同土地保有し、共同給付したことが特徴的に見られるのであり、さらに自由種族民において維持された種族慣習が正にそのままマナー領主の支配の機構にふりかえられ、また逆にそのようなマナーにおいて種族慣習が根強く後世にまで維持されたことが注意されるのである。

以上のような特殊なそして固陋な種族制風習を固執していたウェールズにおいては、イングランドとは大変異ったマナーを成立せしめるが、マナー領主支配は、不自由小作人＝非種族民、自由小作人＝種族民と言ういわばマナーの領民に対してどのように現われるものであつたであろうか。イングランドのマナーにおいては、小作人の自由、不自由の差はマナー領主の封建的支配のあり方の差として現われ、マナー領主にとっては、当然に、その領主支配の場の中核となるべき直領地経営、直領地における不自由小作、農奴の賦役給付機構の維持が主要な関心事となり、自由小作人はいわばマナー外的、あるいはマナーの外縁的存在にすぎなかったが、此処ウェールズにおいては、種族社会の風習が強く、マナーはその種族社会に則つてそれを維持すべき体制にすぎず、マナー領主たる Prince は、一般マナーにあつてはその中核となつていた直領地経営よりも、寧ろウェールズ種族社会の維持に比重をおくものであり、

領主と種族民Ⅱ自由小作人との関係が領主と非種族民Ⅱ不自由小作人とのそれより優先し、非種族民が逆にマナー外縁的存在として現われて来る。つまり、領主Ⅰ不自由小作人Ⅱ農奴関係を中核として自由小作人が外縁にあると言うイングランド的マナー構造をとらず、領主Ⅰ自由小作人Ⅱ種族的社會組織を中核として種族共同体を把握しており、非種族民、不自由小作人が外縁にあると言う構造をとると言えるのではなからうか。

ウェールズ地方には、PrinceⅡbrenhin を中心として同じ血でつながる共同の利害を持った common country と言う強い種族社會意識があつたが、その種族社會は、各地域に多分に行政的機能を持たせたマナーの如きユニットを作る。しかし、そのユニットを管轄するものは prince の執司ではなく、執司はただ不自由小作人の土地保有と徴税とを監督したにすぎなかつた。そして自由小作人Ⅱ一般種族民の保有と徴税とについては、その地域内の gwely の首長 uchelwr or pencenedi が監督したの⁽²³⁾あり、Prince と uchelwr or pencenedi との間には大体毎年一磅程度が金納され、その他にも物納や軍事的奉仕が給付されて semi-feudal な関係が結ばれていたのである⁽²⁴⁾。そしてまたその gwely の内部には、その首長 uchelwr or pencenedi と gwely の構成員との間に同様な semi-feudal な関係が見られ、その間に da や cywarwys の恩貸制および主従関係が見られたことは前述した。つまり、ウェールズのマナーそのものが首長に率いられた gwely のグループであつたのである⁽²⁵⁾。そして Prince or brenhin と gwely の首長、また gwely の首長と gwely の構成員との間には semi-feudal な関係が取結ばれていたところより、いわば血族的封建制、血縁的家父長制封建制とも言うべき関係がウェールズ種族社會のマナーに特徴的に見られると言えるのではないだろうか。ウェールズ社會には、血族、血縁を通じた封建的關係が育つのであり、それがウェールズのマナーの特徴となつていように思われるのである。そしてそうしたマナー領主 brenhin と自由民の種族的封建的結束の外縁には非種族民、不自由民、農奴がおかれており、彼らは、封建領主の隸民と言うよりも、種族社會の、そしてマナーの outsider として、血縁を持たざる者としての待遇を受け、彼らの hamlet も本来直領地

および種族民のそれとは別個に存在し、また非種族民の團結した抵抗、非種族民の結束などを防止するために、彼ら非種族民の組織化を防ぐ意味で彼らには世襲權を認めず、土地、財産は完全に文字通りの平等分割制を施行せしめていたのであった。⁽²⁶⁾つまり非種族民、不自由民には、一部の直領地付属のそれを除いて、隸属的封建的賦役などの負担は輕微であつたが、血縁を持たざる者として一応ウェールズのマナー機構の外におかれて、より原始的な隸属關係におかれていたと言えるようである。従つて、いわゆるマナー領主の封建的支配は、本来自由民、種族民について行われるべきものであり、その嚴格な種族共同体の慣習に則つてそれをマナー領主支配の機構に利用したものにすぎず、その限りにおいてきわめて血族的家父長制的な性格をとらざるを得なかつたと考えられるのである。

しかしながら、本来個人財産の私有觀念に無縁なウェールズ社会にあつても、いわゆるマナーの直領地とか、各 *gwely* の首長 *uchelwr*, *argluyd* には、⁽²⁷⁾その社会的地位に伴う私有地の如きものが漸次形成されつつあつたよう⁽²⁸⁾で、それら有力者の教会への寄進の事実もあり——但しそれには血族乃至家族の賛同を要したらしいが——、また一般種族民にも *pridawr* と言う世襲地の如きものが芽生えつつあつたことは十三・四世紀の法典類の中の時折の夫婦財産の配分に関する規則などより推察出来る。そしてまたこのようないわば擬似私有財には、マナー直領地付属の不自由小作人のような典型的な農奴的不自由民団も成長しつゝあつたことも当然予測される。しかしながらそれにも拘らず、ウェールズの本来的な種族社会におけるマナーの特異性は確認されてよいのではないかと思われるのである。

最後にこのようなウェールズ種族社会におけるマナーのその後の展開について見通しをつけてみたい。ウェールズにおける血族の差別觀念はきわめて根強いもので、遠く十九世紀までもその徴税方法において伝統的差別が遵守される程であるが、ウェールズにおいて構造、慣習の複雑であつたものは、種族、血族、家族制の慣習であつて土地所有のものではなかつたのである。⁽³⁰⁾土地所有はきわめて簡単なルーズなもので、前に述べたように、土地所有の単位と

なっていた *welc or gwely* が、ある *villata or hamlet* の何分の一かをしめていたと言われるだけで、特定の土地に執着して所有していなかったと言う事実は注目に値する。つまり、その村の中では家畜、農具と共にいつも簡単に移動し得たのであり、また人口増による移住も容易であつたようである。⁽³¹⁾ 十二世紀の *Giraldus Cambrensis*⁽³²⁾ によれば、ウェールズの種族民の家は、町や村として建てられず、概ね森林の端に沿って並んで建てられた文字通りの掘立小屋にすぎず、すべて一部屋で全家族が藁の上に寝食し、煙をとる火の煙は屋根のすき間よりもれて出たと言われる。また小屋は、山の脊の夏小屋と、溪谷の冬小屋と二つあり、たえず移動していたことが考えられる。しかし、如何に移動、移住しようとも、血族内の複雑な権利、風習は嚴格に維持されていたのである。このようなウェールズ社会にあつては土地の交換がきわめて容易であり、ウェールズの征服後十三世紀末に *Henry de Lacy* がデンビー近くにイギリス式三圃制農法を入れようとして *Astred Canon* 村⁽³³⁾ の *Canon ap Lauwarghe* を追い出し、その代りに彼ら *welc* に *Wyckewere* 村に同等の土地を与え、また *Llewenny* 村においても同様の交換をしたと言われるが、きわめて土地の交換が容易であり、従つて土地の集中も容易に行われる社会的条件があつたのではないかと予想されるのである。

つまり、血族の権利、風習がきわめて煩わしいものであつたが、一旦、その血族共同体、家父長制 *gwely* 共同体の中に個人主義的、個別的経営の芽が芽生え始めると、各農民達の定着化に伴つてその保有地の交換集中、個別的、合理的な経営への転換が容易に行われ得たことが予測されるのである。明確なその例を多くあげることが出来ないが、此処におけるマナーの解体は、中世末のイギリス的定着農業化の進展、個別的経営の進展による種族組織の崩壊と言う形で進行して行くと言うことが出来るのではあるまいか。これもまた後進地帯の歴史発展の特徴の一つのあり方を示していると言うことが出来るよう。

(1) Seebohm, *The Tribal System in Wales*. pp. vi~vii ただし *welc* は普通二〇~四〇人を含めた大きな家父長制大家族血族であった点が大いに異なる。

(2) *ibid.* p. viii *welc*, *gwele*, *progenies* などと呼ばれたりする。その差別は余り嚴格でない。われわれもその差別に拘泥する必要はないが *progenies* は少々狭い意味が与えられることがあった。(cf. Vinogradoff, *Morgan, Survey of the honour of Denbigh. Records of Social and Economic History vol I*. pp. xxi~xxiii)

(3) *ibid.* p. ix (4) *ibid.* p. xiii (5) *ibid.* p. xii

(6) *ibid.* p. xviii 財産所有権は *pater familias* としての曾祖父 \parallel *gwele* の首長に帰せられていた。サリカ法では *alod* (分田地) には、土地、家畜などのあらゆる財産の家族(家父長制大家族)としての所有権の意味が含まれていたようである。つまり *gwele*, *welc*, *gavel* が種族社会の財産所有の単位であり、又後述するように課税上の単位でもあり、一般に種族社会生活の単位となっていたわけである。

(7) *ibid.* pp. 1~2

(8) 一つの中心となる散村(つまりプリンスの館のある村)があつて、その散村が略々一郡内に散在している散村を支配していると云う形をとるマナーであつた。イングランド地方におけるマナーが、直領地経営を中心として、村の境界を超越した一つの有機的なまとまりを構成するのに対して、ウェールズにおけるマナーは、あくまで村の境界を維持し、各村の独立性を、たとえ不自由村についても維持している点が基本的に異なる訳である。cf. Vinogradoff and Morgan, *Survey of the honour of Denbigh*. p. lxxxvii また余りマナー化の進展していないデンプビー地方などにおいては、各散村があるいは各血族がプリンス *brenhin* に従属すると云う形をとる。詳しくは本文にて後述する。

(9) Seebohm, *op. cit.* pp. 7~8

(10) *ibid.* p. 14 ff. 直領地に従属していた不自由小作人はきわめて典型的農奴に近い存在であつたと思われる。

(11) *ibid.* pp. 16~17 直領地に従属していた不自由小作人は農奴に近い存在ではあつたが、しかしウェールズ征服後、十三世紀末頃より従来の賦役が急速に金納化されて行つた。(cf. Vinogradoff, *Morgan, op. cit.* p. cix) それは、ウェールズにおいては農業よりも牧畜が盛んで、旧来より給付、売買には家畜で支払われる程であつたが、十三世紀の貨幣経済の進展によりそのような家畜による支払いが容易に貨幣支払いに切換えられて行き、賦役の金納化が容易に進展したものと考えられる。古典荘園段階を経ないで、物納地代—金納地代へと展開して行くのが特徴的である。本文の表の給付がすべて貨幣支払いに

換算されているのは、十三世紀末のその過渡的段階を示すものである。耕耘、把耕の労働給付が貨幣に換算されている例は、Vinogradoff, Morgan, op. cit. p. lxxix にも多く出ているが、しかし尚お賦役の残存する例も時折あり、Record of Carnarvon では、Treflog マナーにおいて不自由小作人の賦役は可成り重く、Sace ap Ithel は他の七人と週一日の賦役を共同給付し、また同マナーの Trefios 村の二十八世帯の不自由小作人は、共同で九人を週一日の賦役に出していたと云われる。(cf. Vinogradoff, Morgan, op. cit. p. xlvj)

(12) Seebohm, op. cit. p. 17.

(13) *ibid.* p. 18. 執司が平等に保有することを監督していたと云われる。

(14) *ibid.* p. 19ff.

(15) *ibid.* p. 21. 一年一日の耕作となっている。マナー化の進んでないデンビー地方の場合には、自由小作人、不自由小作人の混合している村の方が圧倒的に多い。何れも家畜、バター類の物納の外に、軽微な農耕奉仕を給付している。それも大抵金納による。(Vinogradoff, Morgan, op. cit. *passim*)

(16) Seebohm, op. cit. p. 8.

(17) *ibid.* p. 9ff. その他 prince=brenhin や公共役人の巡回の時の饗応の義務もあった。(cf. Vinogradoff, Morgan op. cit. p. 46. and pp. 148. 150. におけるナンジャーの Kaymergh 郡 Astrut Oweyn 村および Rawaynock Ysalet 郡 Taldrogh 村の consuetudines communes の項参照)

(18) *ibid.* p. 31 ff. (91) *ibid.* p. 34.

(20) *ibid.* p. 37 ff. (21) *ibid.* pp. 41—3.

(22) 自由小作人も不自由小作人もすべて wele, gavell とされているが、一般に自由人の gavell は、不自由人のそれより大きく倍位あったと云われる。Vinogradoff, Morgan, op. cit. p. xxv and p. 129. "Villata de Beryn...., unde octava pars consistit in tenuta liberorum pro dim. gavella et vii partes consistunt in tenuta Nativorum in vii gavellis (八分の一は自由保有地で半 gavella. 八分の七は nativi の保有地で七 gavellis ととなっている。)" として、自由人と不自由人の gavell は略々同様な機能を果しているが、nativi については progenies と云う言葉が用いられていない。不自由人の場合の血族組織は progenies と云われる程緊密でなく、ルーズなものであった。(Vinogradoff, Morgan, op. cit. p. xxvi) また政策的に、平等保有を強制されたり、世襲権を認められなかったりして血族組織が弱められていたのである。

(23) Seebohm, op. cit. p. 62.

- (24) *ibid.* p. 63. ウェールズの種族社会においては、種族乃至血族の首長 *prince, brenhin* が、各 *wale, gwely* の長 *uchelwr* たちを支配しているのが基本的な構造となっているが、例えば *Abberffraw* の *prince or brenhin* が *Gwent, Dinetia* の *brenhins* を従属させていたとか、また *cantref* 郡や *cymwd* 小郡とかにも、それぞれ法廷を持った首長 *chieftain* がいて、各 *wale, gwely* の長 *uchelwr* たちを法的に支配していたとか云われるように、*brenhin* と *uchelwr* との間には、*territorial chieftain* (すなわち *brenhin* の下にある *under-chieftain* がいた。彼らは *iarl* と呼ばれる。(*ibid.* pp. 136—8) 種族組織内部にもこうした支配階層関係が見られたのである。
- (25) 徴税は記録の上では大体村毎にまとめられているのが普通である。(cf. *Vinogradoff, Morgan, op. cit.* p. lix) しかし、実際には不自由人も自由人も、血族単位で給付しており、例えば本文にあげた *Ughalet* 郡の *Rand Vaghan* *op Asser* と云う *Gwely* は、八ヶの散村に亘って土地保有していたが、*gwely* の首長がそれぞれの散村における当 *gwely* の分前を給付するのを監督したものである。その意味で徴税責任は各血族にあったものと考えられる。その点不自由小作人からの徴税については、彼らの家族群乃至は村で、執司の監督下に徴税されたようである。
- (26) *Seeborn, op. cit.* p. 117. *althud* 新附民とか *taeog* 農奴とか云われるものはいわゆる農奴的存在であったが、基本的には血族、種族社会の *outsider* 的存在とされているものであったと考えられる。
- (27) *ibid.* p. xxviii *gwely* の首長の許には直領地のようなものがあつた。しかし、それも *gwely* の土地と同様に種族慣習の下に含められており、その処分には家族の同意が要つたのであつた。屢々非種族民の外来者に貸与されていた。
- (28) 既に六・七世紀頃から修道院創設に伴う有力者の土地寄進の例が数多くあげられている。*ibid.* pp. 199—224.
- (29) *ibid.* p. xxviii and pp. 150—151. また、夫婦財の分割については p. 97 ff. 例えば豚は夫へ、羊は妻へ、子供については夫へ、 $\frac{1}{3}$ が妻へ、台所用品は妻へ、家禽類は夫へ……などとなっている。つまり特権のない普通の種族民の場合にもある程度の個人財があつたことが分る。結婚した種族民世帯は、それぞれ独立した家屋に住む小さな *dairy farmer* であつた訳で、耕作用具、運搬用具、*5 erws* の播種用穀物などを所有していたのである。
- (30) *ibid.* p. 44. (31) *ibid.* (32) *ibid.* pp. 46—7.
- (33) *ibid.* p. 44. また *Vinogradoff, Morgan, op. cit.* p. xlviii. *Astred Canon* 村と *Kilforn* 村と *Kilforn* ヲナーを作つたと云われる。
- (34) 領主たちは、没収、交換などの手段によって、領地を集中させることが出来たが、(cf. *Vinogradoff, Morgan, op. cit.* p.

chii-cy) また一般農民の間にもその風が移って行ったものと思われる。没収、交換例は各所に散見するが、最も好適な例をあげるに、デンビーの Kaymergh 郡 Skegbeon 村におこづ、"Villata de Skeybion" que continet decexlii acr. terre, bosci et vasti est integraliter escaceta domini videlicet medietas racione mortuorum contra pacem et alia medietas per viam excambii cum quodam David ap Griffuth' cuius progenies habet pro eo allocatum in villis de mathebreut et Trebotle in conmo de Ughdulas prout plenius patet ibidem. Et sic predicta villa de Skeybeon' appnrat ut statim patebit in posterum." (quot. ibid. pp. 27~8) 『Skebion 村は主領主 (William de Montacute) に没収された。即ち半分は平和をみだした致死事件のために、他の半分はある David ap Griffuth' と交換することによって (獲得された)。そしてその David ap Griffuth' の血族は、その代りに、Ughdulas 郡の Mathebreut, Trebotle 村において、充分に (土地が) あった所から、(分前地を持つことを) 許された。そして Skeybeon' 村は確実に子孫に伝えられるように囲込まれたのである。』また Rewaynok' Yassalet 郡の Beryn 村の "Et sic tota villata de Beryn devenit ad manus domini partim per viam excambiorum et partim pro defecta servitiorum et partim racione mortuorum contra pacem videlicet" (quot. ibid. p. 131) この村も交換とか給付怠慢、平和破壊の致死事件などのために全村が領主の手に把握されたところ。また同郡の Lewenny 村における例を見ると、libere tenentes, Nativi の保有にも交換例が散見出来る。"Et nihilominus Ken' ap Lauwargh' occupat xxx acr. terre in Eryvyot' et viii acr. in Guytheryn in excambium pro eadem hereditate de Lewenny per cartam Comitiss Lincolnie." (quot. ibid. p. 57) この場合、リンカン伯の命により本村における世襲地と交換に Guytheryn は (Rewaynok' Ughalet' 郡) にハエーカーの土地を得たこととなっているが、上司の命がはつきり出でなう交換保有の例も少なくない。"Item Irel Gogh' ap Ken' ap Lor' et David ap Ithel ap Lor' tenent et habent excambium in Legherd' et alibi" (quot. ibid. p. 58) Legherd 村は同じ郡内にあった。また Nativi の "Item Bleth' ap Eden', Madok Gogh' ap Eden', lor' ap Eign' Duy' et Ken' frater eius tenent et habent excambia in Eryvyot'" (quot. ibid. p. 59) Eryvyot 村も同じ郡内、一般農民の交換は、同じ郡内で近くの村と行われたことが考えられる。

- (35) Vinogradoff, Morgan, op. cit. p. ci. Secoim, op. cit. pp. xxiv ~ xxxii gwely の土地の外に、いわゆる boc-land の如きものが次第に形成されつつあった。また公共的な地代 tunc が村単位で、各 gwely, wele が責任を持って給付していたが、一部のものがその tunc 給付から除外されたりして次第に各人の保有に対する地代を別個に給付するようになって来

る。種族的土地所有の崩壊を物語るものである。(cf. Vinogradoff, Morgan, p. lxi~liii) また曾ての自由種族民が *nativi* 化されたりして種族組織の弛緩も進行する。"Et sciendum quod temporibus Principum primo constitebat tota *villata de Dyrnbiggh in duabus gavellis nativorum quantum una gavella fuerat liberorum altera et ideo vocabatur dicta gavella Wellice gavel Reth, quasi gavella, libera……"* (quot. Vinogradoff, Morgan, p. 53) テンジー村の *Nativi* の 2 *gavells* より成っていたが、その中の一つは曾て別の自由民の *gavel* であり、そのウェールズ(種族民)の *gavel* は、自由な *gavel* の様に、*gavel Reth* と呼ばれていた。この名は自由民の *gavel* の名であった訳である。(cf. *ibid.*, f. n. d.) またさらに註(34)で領主が領地を集中して囲込んだ例をあげたが、一般農民も牧草地を領主より借りて不法に耕地とし、そこに建物を建てたりして個別的な経営を始めていた。(ibid. p. xlii, f. n. 3) Kaymergh 郡の Brenbagle 村におこつて、"Et tempore Comitis Lancastrie fuit dicta hamella dimissa viii tenentibus tenenda in herbagio, qui postea dictam hamellam edificarunt, et inde converterunt in terram arabilem clx acr. contra formam dimissionis predictae. Unde de tenentibus et eorum proportionibus et serviciis statim patebit in posterum." (quot. *ibid.*, p. 21) "テンカスター侯の時にこの散村は、牧畜税を給付して保有する八人の保有者に分けて貸された。その後彼らはこの散村を建て、貸付条件に違反して一六〇エーカーを耕地とした。そうして彼ら保有者および彼らの分前と奉仕については、何れもしっかりと子孫に伝えられるように(されたのである)。"

(本稿は昭和三十七年度科学研究費総合研究「資本制の生成発展期における政治と経済の諸関係についての総合的研究」の分担報告の一部である。)